

がんを自分事として考え、認識を深める保健の授業

— 教科等横断的な視点による道德の授業と関連を図ったがん教育 —

忠隈 一也¹

中学生は、比較的健康に毎日を過ごしており、がんに係る学習課題を他人事としてとらえていることが多い。また、がんに対する正しい認識を深める教育は不十分であると指摘されている。本研究では、教科等横断的な視点で、心情を学ぶ道德と関連させた保健の授業を行った。その結果、がんを自分事として考え、認識を深める学習となった。そこで、成果等から授業づくりのポイントを提案することとした。

はじめに

わが国では、平成18年に制定された「がん対策基本法」に基づき、平成24年に「がん対策推進基本計画(第2期)」が施策の新たな分野として加わった。そこでは、「学校での教育のあり方を含め、健康教育全体の中で『がん』教育をどのようにするべきか検討し、検討結果に基づく教育活動の実施を目標とする」(文部科学省 2012)ことが示された。

その後、「学校におけるがん教育の在り方について(報告)」(以下、「がん教育の在り方」という)において、「保健体育科を中心に学校の実情に応じて教育活動全体を通じて適切に行うことが大切である」(文部科学省 2015 p. 4)と示された。

「中学校学習指導要領(平成29年告示)」(以下、「新指導要領」という)の保健分野の内容の取扱いにおいては、新たに「がんについても取り扱うものとする」と示され、『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説保健体育編』(以下、『新解説保健体育編』という)では、「(ウ)生活習慣病などの予防」に「④がんの予防」(文部科学省 2017a p. 211)が新たに明記され、具体的な指導内容が示された。

筆者は、本県の取組の一つである「がん教育モデル授業の実践」対象校の教員として、平成27・28年度にがん教育の授業を実践した。その中では、生徒はがんについて学習し、一定の知識を身に付けたと考えられるが、多くの生徒は「がんの予防」について、「自分事」として考え、認識を深めるまでには至っていないと感じていた。このことは、がんを授業で扱う際の課題の一つと考えられる。

また、「新指導要領」には、特別の教科道德(以下、道德という)の内容として「生命の尊さ」が示されており、『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説特別の教科道德編』(以下、『新解説道徳編』という)には、「各教科等と道徳科の指導との関連をもたせた学習

指導が大切である」(文部科学省 2017b p. 82)と示されている。このことから、教科等横断的な視点で保健と道德の関連を図った授業を行うことは、「がんの予防」を学ぶ上で有効であると考えられる。

そこで本研究では、「生命の尊さ」に係る心情を学ぶ道德の授業の後に「がんの予防」を扱う保健の授業を行うことで、がんを自分事として考え、認識を深めることができると考え、本主題を設定した。

また、道德と関連させた保健の授業づくりのポイントを提案することで、来年度から全面实施する新指導要領に基づく授業づくりに貢献できると考えた。

研究の目的

教科等横断的な視点で道德の授業と関連させ、がんを自分事として考え、認識を深める保健の授業づくりのポイントを提案する。

研究の内容

1 がん教育について

「がん教育の在り方」では、学校におけるがん教育の基本的な考え方として、「がんそのものの理解やがん患者に対する正しい認識を深める教育は不十分であると指摘されている。学校教育を通じてがんについて学ぶことにより、健康に対する関心をもち、正しく理解し、適切な態度や行動をとることができるようにすることが求められている。」(文部科学省 2015 p. 1)と、がん教育の意義を示している。

また、平成29年10月に施行された「がん対策推進基本計画(第3期)」では、がん教育の普及・啓発のために、「子どもが健康と命の大切さについて学び、自らの健康を適切に管理するとともに、がんに対する正しい知識、がん患者への理解及び命の大切さに対する認識を深めることが大切である」(厚生労働省 2017)と、教育現場におけるがん教育の必要性が示され、一層の推進が求められている。

このことから、学校教育において、がんについて正

1 茅ヶ崎市立西浜中学校
研究分野(授業改善推進研究 保健体育)

しい理解を深めることで、がん患者やその家族に対する見方・考え方が変化し、これからの社会の中で活用することができる実践力を育むことができると考える。

2 がんを自分事として考え、認識を深めることについて

「中学生の時期は、比較的健康的に毎日を過ごせる場合が多いため、自己の生命に対する有り難みを感じている生徒は決して多いとは言えない」（文部科学省 2017b p. 62）と示されており、筆者も、これまでの授業を通して感じていることとして重なる部分でもあった。よって、生徒は、がんについて身近な健康課題として実感がわかず、自分とはかけ離れた問題としてとらえている生徒もいると考えられる。そこで、がんに係る学習課題が生徒にとって他人事ではなく、「自分事」となることが重要であると考えた。自分に関係があると意識できる学習課題を設定することで、生徒は自分事として考え、がんの知識の習得や、がん患者への理解、生命の大切さに対する認識を深めることができると考えた。

本研究における「自分事」については「周囲の大切な人を含めた、自分自身の生活に関わること」と定義した。

3 教科等横断的な視点について

「がん教育の在り方」に、がん教育の目標として「がんについて正しく理解することができるようにする」、「健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにする」（文部科学省 2015 p. 2）と示されている。本研究では、この目標をねらいとし、保健「がんの予防」において、がんに係る正しい知識について、道徳「生命の尊さ」において、健康と命の大切さについて取り扱うこととした。

また、『新解説道徳編』では、「各教科等における学習と道徳科の指導のねらいが同じ方向をもつものである場合、学習の時期や教材を考慮したり、相互に連携を図ったりした指導を進めると、指導の効果を一層高めることが期待できる」（文部科学省 2017b p. 83）と示され、『新解説保健体育編』においても、「体育・健康に関する指導は、保健体育科の時間だけではなく技術・家庭科や特別活動のほか、関連の教科や道徳科、総合的な学習の時間なども含めた学校の教育活動全体を通じて行うことによって、その一層の充実を図ることができる」（文部科学省 2017a p. 245）と示されている。

よって、保健「がんの予防」と道徳「生命の尊さ」を教科等横断的な視点で関連させた学習を計画し、ひとまとまりの内容として実施することで、指導の効果を一層高めることができると考えた。

4 研究の仮説

「教科等横断的な視点により、道徳の授業『生命の尊さ』で、心情に働きかけた後に、保健の授業『がんの予防』を学習することで、がんを自分事として考え、認識を深めることができるであろう」と仮説を設定し、検証することとした。

5 検証方法

教科等横断的な視点での検証授業を実施し、アンケート及び、授業における生徒の記述内容の結果から、次に挙げる三つの視点で生徒の変容を分析し、仮説を検証した。

- (1) 生徒は道徳の授業をどのようにとらえたか
- (2) 生徒は保健の授業をどのようにとらえたか
- (3) 生徒はがんを自分事として考え、認識を深めることができたか

6 検証授業

(1) 概要

【実施期間】	令和2年9月11日(金)～9月25日(金)
【対象】	茅ヶ崎市立西浜中学校 第2学年 1組(28名)、2組(28名)、3組(29名)
【授業時数】	道徳1時間、保健2時間
【単元名】	特別の教科道徳 D(19)生命の尊さ 保健分野 健康な生活と疾病の予防 (ウ)生活習慣病などの予防「㊦がんの予防」

(2) 単元の流れ

単元の概要は第1表のとおりである。

第1表 単元の概要

時間	教科/単元	学習のねらい
事前		○配慮を必要とする生徒への対応：保護者への学習内容等の通知、生徒の実態把握、担任・養護教諭との連携等を実施 ○アンケート(事前)・メッセージ活動(事前)
1	道徳「生命の尊さ」	生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。
2	保健体育(保健分野) 「がんの予防」	がんは、異常な細胞であるがん細胞が増殖する疾病であり、その要因には不適切な生活習慣をはじめ様々なものがあることを理解できるようにする。
3		がんの予防には、生活習慣病の予防と同様に、適切な生活習慣を身に付けることなどが有効であることを理解できるようにする。 [メッセージ活動(事後)]
事後		○アンケート(事後)

(3) 学習指導の工夫

ア 道徳「生命の尊さ」を学ぶ教材

がんを自分事としてとらえる学習となるように、同年代のがん患者の教材を活用し、自身と照らし合わせ、生命の大切さについて考えることをねらいとした。

本教材は、11歳で右大腿骨骨肉腫を患った猿渡瞳さんが、中学校2年生の時に弁論大会で読んだ作文「命を見つめて」（物部・杉崎 2018）と、弁論大会で発表した時の写真・音声や、瞳さんの母親へのインタビュー動画が収録されている。闘病生活に係る話や、がん患者の家族や周囲の人が支え合うことの大切さがわか

る内容となっている。

イ 保健「がんの予防」を学ぶ教材

次の教材を、がんについて生徒が学びやすいと考え、活用した。

- ・スライド「がんを知ろう！」神奈川県
- ・スライド「がんという病気」文部科学省
- ・グラフ「がんの要因」国立がん研究センター
- ・動画「がんって、なに？」(公財)日本対がん協会

ウ 保健の授業における道徳の授業との関連の図り方



第1図 「回想スライド」の一部

道徳を含めたこれまでの学習を振り返るために、保健の授業の2時間目(後半)に、各時間で学習したことを想起させるための「回想スライド」を活用した。第1図は「回想スライド」の一部である。

エ がんを自分事として考え、認識を深めるための学習の工夫

「命を守るためのがんの予防とがんとの付き合い方について大切な人にメッセージを書こう」というテーマで、3時間(道徳1時間、保健2時間)の事前と3時間の授業の最後にメッセージを作成する活動を行った。

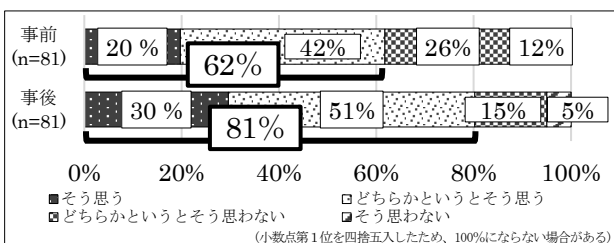
3時間で学んだ「がんの予防」と「がんとの付き合い方」をテーマとし、メッセージとして表現させることで、生徒が学習内容について認識を深めるとともに、その認識の変容を感じ取ることができると考えた。

また、生涯のうちがんにかかる可能性は、二人に一人とされている今日において、自分だけでなく最も身近で大切な人である家族もがんに罹患する可能性があることを踏まえ、メッセージの対象を「大人になった自分」「父」「母」とすることで、生徒ががんをより身近な健康課題としてとらえ、自分事と感ずる効果があると考えた。

7 検証授業の結果と考察

(1) 生徒は道徳の授業をどのようにとらえたか

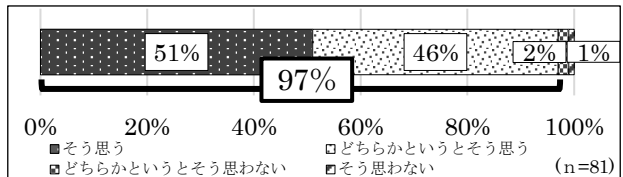
第2図は、事前と事後アンケートの「『道徳の授業』に興味・関心をもって取り組めた」という質問に対する回答割合である。



第2図 「『道徳の授業』に興味・関心をもって取り組めた」に対する回答割合

第2図を見ると、「そう思う」と「どちらかというと思う」を合わせた群(以下「そう思う群」という)の割合は、事前の62%から事後では81%と19ポイント上昇し、約8割の生徒が肯定的な回答を示した。また、事後では「そう思う」「どちらかというと思う」と回答した生徒が、それぞれ約10ポイントずつ上昇する結果となり、多くの生徒が道徳の授業に対する興味・関心が高まったことがわかった。

第3図は、事後アンケートの「生命の大切さについて深く考えることができた」という質問に対する回答割合である。



第3図 「生命の大切さについて深く考えることができた」に対する回答割合

第3図を見ると、「そう思う群」の割合は97%と、高い割合となった。また、その中で「そう思う」と回答した生徒は51%と約半数であった。

また、第2表は、道徳ワークシート(振り返り)の「今日の授業を通して、生命(いのち)についてどのように考えましたか?」という質問に対する回答の自由記述を抜粋したものである。

第2表 道徳の振り返りの記述(一部抜粋)

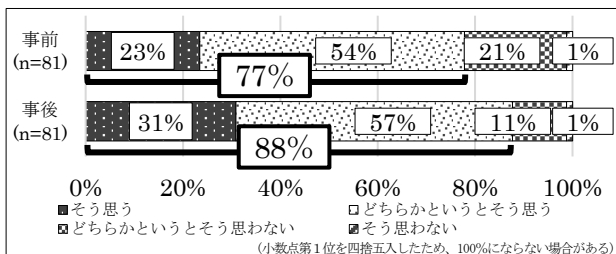
生徒A	生命があるからできること、生命があるからできないことそれぞれあると思うけど、生命は誰にでも大切。生命は自分だけではなく、誰かのためになると気づきました。
生徒B	毎日、普通に生きているけど、生きたくても生きられない人がいることを考えて生きる必要があると思いました。
生徒C	生命は、人間にとってなくてはならないもので、今日猿渡瞳さんの「命を見つめて」という弁論を聞いて、改めて命という重さを感じられました。
生徒D	瞳さんのお母さんの動画が印象的だった。大切な命なので、いろいろな人に迷惑をかけず、一生懸命悔いの無いように生きていこうと思った。

第2表の生徒A・Bは、いずれも自分だけでなく、他者の存在を認識した記述(下線部)、生徒C・Dは、同年代のがん患者やその母親の思いに触れたことから、生命について考えることができた記述(下線部)が見られた。これらは、がん教育の目標に示されている「がんについて学ぶことや、がんに向き合う人々と触れ合うことを通じて、自他の健康と命の大切さに気付き、自己の在り方や生き方を考え」(文部科学省 2015 p. 2)に該当する記述と考えられる。

これらのことから、多くの生徒は、生命の大切さについて深く考えることができた。

(2) 生徒は保健の授業をどのようにとらえたか

第4図は、事前と事後アンケートの「『保健の授業』に興味・関心をもって取り組めた」という質問に対する回答割合である。

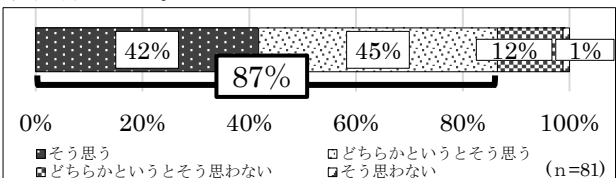


第4図 「『保健の授業』に興味・関心をもって取り組めた」に対する回答割合

第4図を見ると、「そう思う群」の割合は、事前の77%から88%と11ポイント上昇した。

保健の授業後の振り返りには、今回活用した視聴覚教材(資料)について、「わかりやすい動画とかがあって、がんがどのように大きくなるかしっかり分かった」や「大腸がんの写真を見たら、とてもびっくりしたし、こんなものが体の中にあると思うととても怖いと思った」といった記述が見られた。

第5図は、事後アンケートの「『保健の授業』について深く考えることができた」という質問に対する回答割合である。



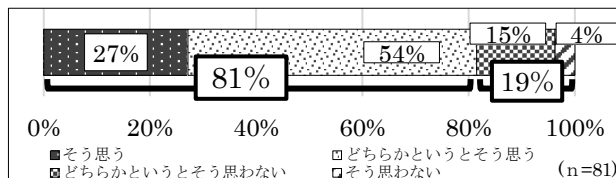
第5図 「『保健の授業』について深く考えることができた」に対する回答割合

第5図を見ると、「そう思う群」の割合は87%と、概ねの生徒が今回の保健の授業について深く考えることができたと回答している。

保健の1時間目では「もっと知識を増やしてがんにならないよう、予防・対策を心がけていきたいと思った」、保健の2時間目では「がんになる可能性は低くない!と頭に入れて将来ちゃんと健康診断やがん検診をしようと思います」という記述が見られた。

これらのことから、がんについて学習する視聴覚教材を活用したことで、授業に対する興味・関心に結び付き、がんについて深く考えることができたと考えられる。

第6図は、事後アンケートの「3時間の授業を終えてみて、道徳で学んだことを、保健の学習に生かすことができましたか?」という質問に対する回答割合である。



第6図 「道徳で学んだことを、保健の学習に生かすことができましたか?」に対する回答割合

また、第3表は、第6図の質問「選んだ理由を書いてください」に対する自由記述の回答である。

第3表 第6図に対しての自由記述の内容

「そう思う群」に回答した記述内容(抜粋)
<ul style="list-style-type: none"> 道徳では小児がんにかかった人のことを知り、改めてがんは怖いと思ったから、<u>その気持ちを持ちながら保健の学習ができた。</u> 道徳で女の子が骨肉腫になった物語で、<u>その後の保健の授業もその人のことを関連させて考えられたから。</u> 道徳の授業で命のことをやってその人はがんで亡くなったから、そういう所が<u>保健の授業に生かせると思う。</u>
「そう思わない群」に回答した記述内容(抜粋)
<ul style="list-style-type: none"> 保健の時に<u>道徳のことも考えられなかった。</u> 道徳が保健に<u>つながるとは思えない。</u> そんなに<u>関連性はなかった。</u>

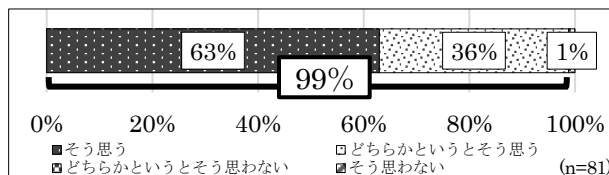
第6図を見ると、「そう思う群」の割合は81%と、概ねの生徒が道徳で学んだことを保健でいかすことができたと回答している。また、81%の「そう思う群」に回答した生徒の記述(第3表)には、「道徳で学んだことを保健の授業で生かせた」や「関連付けて学ぶことができた」という記述が多く見られた。

これらのことから、概ねの生徒が道徳で学んだことを保健でいかすことができたことがわかった。

しかし、「思わない」「どちらかというと思わない」と回答した19%の生徒の記述には、関連性を感じなかった旨(第3表)が書かれており、今回の道徳の授業が直接「がんの予防」に結び付かなかった生徒もいたことがわかった。

(3) 生徒はがんを自分事として考え、認識を深めることができたか

第7図は、事後アンケートの「『がんの予防』について自分事として考えることができた」という質問に対する回答割合である。



第7図 「『がんの予防』について自分事として考えることができた」に対する回答割合

第7図を見ると、「そう思う群」の割合は99%となり、ほぼ全ての生徒が、「がんの予防」を自分事として考えることができたと回答している。

第4表は、「事前・事後のメッセージの内容から認識の深まりを見とる判断基準」である。

第5表は「メッセージの内容において、がんに対する認識が深まったと判断した割合」であり、第4表の基準に基づき、「メッセージ活動」における事前と事後の変容を見とり、認識の深まりを検証することとした(筆者と当センター指導主事2名、計3名で分析した)。

第4表 事前・事後のメッセージの内容からがんに対する認識の深まりを見とる判断基準

記述内容の観点	具体的な記述内容	がんに対する認識の深まりを見とる判断基準
「がんの予防」に関する内容	・がんの要因 ・生活習慣等	(ア)メッセージに新たな知見が加わったか (イ)メッセージがより具体的な表現となったか
「がんとの付き合い方」に関する内容	・健康診断 ・がん検診等	(ウ)メッセージに根拠が加わるなど、より理論的な表現となったか

第5表 メッセージの内容において、がんに対する認識が深まったと判断した割合(n=77)

記述内容の観点	がんに対する認識が深まったと判断した割合(人数)	合計
「がんの予防」に関わる内容(がんの要因、生活習慣等)	16%(12名)	91%(70名)
「がんとの付き合い方について」に関わる内容(健康診断、がん検診等)	23%(18名)	
両方の内容を記入	52%(40名)	

第5表を見てみると、メッセージの内容において、事前と事後を比較した結果、91%の生徒が、認識が深まった(第4表「がんに対する認識の深まりを見とる判断基準」に該当する内容)と判断できる記述内容であった。

次に、メッセージの変容が見られ、認識が深まったと判断した記述内容の例を、第6表に示した。下線・太字は、それぞれの基準に基づき、認識が深まったと判断できる部分である。

第6表 メッセージの記述内容例

生徒E (大人になった自分へ) 【「がんの予防」に関する内容】 判断基準 (ア)
<事前>がんにならないように頑張ってください。
↓
<事後> <u>飲酒や喫煙は肝臓がんや肺がんになったりするので、飲みすぎや吸いすぎには気を付けてください。</u> たとえば、がんになっても、それが早期発見なら治る確率は十分にあるので、その時はあきらめずに頑張ってください。
生徒F (大人になった自分へ) 【「がんとの付き合い方」に関する内容】 判断基準 (ウ)
<事前>運動とかしっかりして、健康にいれるように頑張ってください。保険に入っておいってください。たまに体を見に行ってください。(健康診断)
↓

<事後>主ながんの要因は、生活習慣が1番の要因なのでこのことを改善できれば6割は予防できるので、もう今生活習慣が崩れているのなら、この生活習慣を直してください。次に健康診断やがん検診でがんを早期発見、早期治療することによって95%の人が治るので、お金がかかるのが嫌だと思うので、年に一度検診を受けに行ってみてください。それでもし、がんになったとしても、前向きにとらえて病気と闘って勝ってください!

生徒Eは、がんの要因や予防に関することについて、事前では特に記述はしていなかったが、事後では、3時間の授業を通して学んだ「がんになる要因」について説明する記述が見られた。また、生徒Fは、事前では、がんとの付き合い方についての記述は「健康診断」だけであったが、事後では「がん検診・早期発見・早期治療」といった授業で学んだ内容が追加されただけでなく、「早期発見、早期治療することによって95%の人が治る」と具体的に説明している。また、検診の頻度についても記述しており、根拠が加わったメッセージへの変容となった。

これらのことから、多くの生徒は、授業で扱ったがんの特性やがんの予防についての知識(生活習慣の改善や健康診断・がん検診の意義)を、事後のメッセージに反映させており、「がんの予防」を自分事として考え、認識を深めることができた。

研究のまとめ

1 成果と課題

(1) 教科等横断的な視点による学習過程の有効性

本研究では、保健「がんの予防」のねらいをより一層効果的に行うために、教科等横断的な視点による、道徳と保健を関連させた授業を行った。

道徳「生命の尊さ」の授業後に、保健「がんの予防」の授業を実施することは、関連性を持たせやすく、生徒が自他の生命の大切さを自覚しながら、「がんの予防」を学習することにつながり、中学校におけるがん教育の要として有効に機能することがわかった。

しかし、道徳と保健が関連しなかった(結び付かなかった)と感じた生徒もいたことから、保健の授業において、道徳で学んだことを振り返ったり、想起させたりする活動や場面の設定が十分でなかったと考える。

(2) 同年代のがん患者を教材とすることの有効性

道徳の教材として活用した、同年代のがん患者の教材は、生命の大切さを改めて考えることができる機会になるとともに、同年代の対象生徒にとって、がんをまさに自分事として考える良いきっかけになったのではないかと考えられる。さらに、資料(作文)を読むだけでなく、がん患者本人の写真や音声(映像)があったことで、授業に対する興味・関心が高まり、生命の大切さについて深く考えることに有効であったと考える。

(3) 大切な人へのメッセージ活動の有効性

本研究の授業において、「がんの予防とがんと付き合い方」について、身近にいる大切な人へのメッセージの作成を二度行った。(第1表参照)

この活動は、がんについて生徒が自分事として考えるための手立てとなっただけでなく、思考の変容や知識の深まりがメッセージの内容を通して見えてきたことから、学習の定着や自己の考えを整理する活動として有効であり、がんに対する認識を深めることができる活動であることがわかった。

(4) がんを「家族の視点」で考えることの有効性

本研究においては、自分事の定義(p. 2参照)に照らし合わせ、道徳と保健の授業の双方に、家族の視点を盛り込んだ。がん患者の母親のインタビュー動画を活用したり、「自分ががん患者の家族だったらどのように受け止め、どのような行動をとるか」や「自分だけではなく、身近な人(家族)のがんの予防の仕方」を考えさせたりするなど、家族の視点を授業に取り入れたことが、がんを自分事として考え、認識を深める上で有効であったと考える。

2 授業づくりのポイントの提案

本研究では、「教科等横断的な視点で道徳の授業と関連させ、がんを自分事として考え、認識を深める保健の授業づくりのポイントを提案する」を目的とし、授業実践と仮説の検証を行った。そこで、研究の成果と課題を踏まえ、授業づくりのポイントを提案する。

- (1) 道徳「生命の尊さ」、保健「がんの予防」、がん教育のそれぞれのねらいを明確にした上で授業を構想する。
- (2) 道徳「生命の尊さ」の授業の後に、続けて(本研究では、約2～3日後)保健「がんの予防」の授業を実施する。
- (3) 道徳と保健の相互のねらいに関連する教材を作成(活用)し、保健の授業において、道徳で学んだことを振り返ったり、想起させたりする活動や発問等を意図的・計画的に取り入れる。
- (4) 道徳「生命の尊さ」の授業及び保健「がんの予防」の授業において、自分を含めた家族の視点で考える場面を設定する。

生徒への配慮については、第1表で示した通りである。

3 今後の展望

今回、がん教育の目標等を踏まえ、授業づくりを行ってきた。がんについて学習することは、生徒にとって、これから先の人生を考えると、必要な学習であることを改めて実感した。

学校におけるがん教育をより充実し、効果的なものにするためには、保健の授業だけでなく、教科等横断

的な視点でアプローチすることが、有効な手立てになると考える。道徳に限らず、総合的な学習の時間や特別活動との関連も視野に入れることで、がん教育の行い方に広がりが出てくると思われる。

今後、学校全体によるがん教育の推進に貢献していきたい。

おわりに

授業の振り返りでは、「病気の中で一番学びたかったのが、がんだったので、すごく勉強になった」、「今までがんになったら死んでしまうというイメージがあったが、今日で生活習慣を見直せば6割が予防できると知り、考え方が変わった」などの記述が見られ、生徒にとって、意義のある学習内容となったと手応えを感じている。

今後も、よりよい学校におけるがん教育の在り方を具体的に考えながら、授業づくりに取り組んでいきたい。

最後に、本研究を進めるにあたり、御協力いただいた、茅ヶ崎市立西浜中学校の職員をはじめとする全ての皆様方に深く感謝申し上げます、結びとする。

引用文献

- 厚生労働省 2012 『がん対策推進基本計画(第2期)』
https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouho-u-10900000-Kenkoukyoku/gan_keikaku02.pdf (2020年12月26日取得) p. 31
- 厚生労働省 2017 『がん対策推進基本計画(第3期)』
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouho-u-10900000-Kenkoukyoku/0000196973.pdf> (2020年12月26日取得) p. 73
- 文部科学省 2015 『学校におけるがん教育の在り方について(報告)』
https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/_icsFiles/afieldfile/2016/04/22/1369993_1_1.pdf (2020年12月26日取得)
- 文部科学省 2017a 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説保健体育編』 東山書房
- 文部科学省 2017b 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説特別の教科道徳編』 教育出版

参考文献

- 物部博文・杉崎弘周 2018 「各校種におけるがん教育の展開例」(『学校におけるがん教育の考え方・進め方』 大修館書店) pp. 106-107